

次の文章を読んで思うところを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。

(教学社注：解答用紙には題目を書く欄が設けられている)

現代文化人類学の祖とされるマリノフスキーが活躍した二十世紀初頭以来、文化人類学者であることの条件のひとつは、研究対象地で長期にわたってフィールドワークをおこなうことである。現地の言語を学び、現地の人々と寝食を共にしながら、参与観察によって、人々の考え方ややり方にゼロ接近する。その過程で、文化人類学者には、現地に入った初期の段階で感じていた違和、居心地の悪さみたいなものが、少しずつであるが溶解し、理解可能なものとなっていく。逆に、現地の人々のやり方や考え方から自分自身を遠ざけていたものが何であったのか、自分自身を呪縛していた文化的な背景とは何であったのかについて考えるようになる。

私自身が、プナンのフィールドワークの初期段階で抱えていた違和感のひとつは、「プナンは日々を生きているだけで、反省のようなことをしない」というものだった。私が町で買って持ち込んだバイクを彼らに貸すと、タイヤをパンクさせても、何も言わずにそのまま返してくる。バイクのタイヤに空気を入れるポンプを貸すと、木材を運搬するトレーラーに轆かれてペチャンコになったそれを、何も言わずに返却してくる。こうした様々な体験がその違和感には含まれる。

プナンは、過失に対して謝罪もしなければ、反省もしない人たちだというのが、私の居心地の悪さに結びついていたのである。そして、この違和感は、プナンでのフィールドワークを始めてから十年を超えた今でも、大きな謎のままである。

(中略)

狩猟や漁労に出かけたり、用事で出かけたりする時、失敗や不首尾、過失について、プナンは個人に責任を求めたり、「個人的に」反省を強いるようなことをしない。失敗や不首尾は、個人の責任というより、場所や時間、道具、人材などについての共同体や集団の方向づけの問題として取り扱われることが多い。失敗や不首尾があれば、話し合いの機会を持つが、そこでは、個人の力量や努力などが問題とされることはまずない。ましてや個人の責任が追及されるようなことはなく、たいてい、長い話し合いの後に、あまり効果を期待できそうにない今後の方策が立てられるだけである。

なんとも不思議なのである。(中略)

プナンは、後悔はたまにするが、反省はたぶんしない。なぜ反省しないのか。いや、その問い自体が変なのかもしれない。実は、私たち現代人こそ、なぜそんなに反省するのか、反省をするようになったのかと自らに問わなければならないのかもしれない。しかし、とりあえず今、プナンがなぜ反省をしないのか、しないように見えるのかについて考えてみれば、以下のふたつのことが考えられる。

ひとつは、プナンが「状況主義」だということである。彼らは、過度に状況判断的である。その時々々に起きている事柄を参照点として行動を決めるということをつねとしていて、万事うまくいくこともあれば、場合によっては、うまくいかないこともあると承知している。そのため、くよくよと後悔したり、それを反省へと段階を上げたりしても、何も始まらないことをよく知っているのである。

もうひとつは、反省しないことは、プナンの時間の観念のありように深く関わっているのではないかと一点である。直線的な時間軸の中で、将来的に向上することを動機づけられている私たちの社会では、よりよき未来の姿を描いて、反省することをつねに求められる。そのような倫理的精神が、学校教育や家庭教育において、徹底的に、私たちの内面の深くに植えつけられている。私たちは、よりよき未来に向かう過去の反省を、自分自身の外側から求められるのである。しかし、プナンには、そういった時間感覚とそれをベースとする精神性はどうやらない。狩猟民的な時間感覚は、我々の近代的な「よりよき未来のために生きる」という理念ではなく、「今を生きる」という実践に基づいて組み立てられている。